令和５年度　学校経営計画・自己評価書

足立区立栗島中学校
校長　豊　崎　　努

１　学校教育目標

人権尊重の精神を基盤とし、規範意識と豊かな個性、創造力をもって社会に貢献しようとする精神を培い、心身ともに健やかで夢や希望を実現する自立した人を育てる教育を推進する。
・進んで学ぶ生徒　　・思いやりのある生徒　　・根気強くやりぬく生徒

２　めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	・自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力(人間力)を育成する学校 ・確かな学力を身に付けさせ、心豊かな生徒を育てる学校
○児童・生徒像	・進んで学ぶ生徒 ・思いやりのある生徒 ・根気強くやりぬく生徒
○教師像	・授業を大切にし、自ら学び続ける教師 ・保護者や地域に信頼される教師

３　学校の現状及び前年度の成果と課題

【学校の現状】
・授業は比較的落ち着いた雰囲気であり、生徒は真面目に学習に向かっている。家庭学習の習慣が身につかず学力の定着に課題がある。
・保護者や地域は学校教育に理解を示し、協力的である。
・英語において、習熟度別少人数指導による授業展開を実施し、学力の定着と向上に取り組んだ。
【生徒について】
＜成果＞
・規範意識を高くもち、生徒会活動、委員会活動、部活動に積極的に取り組んでいる。
・「立志の時間」（総合的な学習の時間）での調査・研究・発表を通して、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を身に付けた。
＜課題＞
・主体的に学習に取り組む意欲が依然として低い傾向にあり、家庭学習の習慣が身につかず、学習内容を定着させられない生徒が多い。
・読書習慣のある生徒が少ない。読解力や想像力が十分に育っていない一因と考えられる。
・真面目ではあるが、目的意識や自ら解決しようという意欲が低く、大人の指示を待つ、指示に頼ろうとする傾向がある。
【教職員について】
＜成果＞
・新学習指導要領の実施に向けて「生徒の主体性を生かした授業改善」と「評価・評定のあり方」について研修を深めた。
・生活指導においては、校内支援委員会及び生活指導部会を基盤に支援と指導の両面から全教職員共通理解のもと、組織的に生徒の課題に対応した。
＜課題＞
・若手教員が多くを占めており、経験の少なさを熱意で補っている状況も見える。
・ベテラン層が中心となり、意図的・計画的で組織的なＯＪＴの実施、研修の運営など、教員の資質向上を通した更なる授業改善が課題である。
【地域、保護者について】
＜成果＞
・開かれた学校づくり協議会やＰＴＡが中心となって、花壇の整備等、学校環境整備がなされた。
＜課題＞
・学力向上のためには自ら学ぶ意欲が重要であることを家庭と共有する。家庭学習の定着に関して、家庭との協力体制を構築し、推進していく。

4　重点的な取組事項

	内　　容	実施期間（年度）　R:令和				
		R3	R4	R5	R6	R7
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	生きる力を育む教育	○	○	○	○	○
3	思いやりの心や豊かな心を育む教育	○	○	○	○	○

5　令和５年度の重点目標

重点的な取組事項－１	学力向上アクションプラン

Ａ　今年度の成果目標	達成基準 （目標通過率）	実施結果 （通過率結果）	コメント・課題	達成度 ◎○△●
・基礎学力の向上 ・カリキュラムマネジメントの視点からの生徒の主体性を生かす指導の工夫	目標通過率は学校平均で 50%以上を目標とする。 正答率においては 50%以上を目標とする。到達度確認テストを行い、55%以上(5%上昇)を目標とする。 区学力調査の意識調査で、教科への意欲や理解度、日常生活での意欲などの設問を独自に年３回実施し、肯定的評価を年間通して向上させる。	通過率 1 年･60%、2 年･57%、3 年 35% 肯定的評価 1 年･87%→86%→84% 2 年･83%→82%→88% 3 年･56%→62%→80%	通過率は１，２年生で達成している。３年生が低い結果となったことを分析し改善を図った。 意識調査は中間調査での結果を全教員で分析、共有することができた。 最終結果までの３年生の推移から、取組自体の方向性を確認できた。学年ごとの推移の違いを分析し、３年間を通した教育のあり方を検討する機会になった。	△

Ｂ　目標実現に向けた取組み

新・継	アクションプラン	対象学年 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 （誰が、何を、どのように）	達成確認 方法	達成目標 （＝数値） （いつ･何を･どの程度）	実施結果	コメント･課題	達成度 ◎○△●
1 継続	学力アップ （朝・放課後）	全学年 国・数・英・社 理	毎日	年間計画に沿って基礎学力と学習習慣の定着を目的に、学習コンテストに向けた課題や、ＡＩドリル活用などを通して、個に応じた課題に取り組ませる。	ＡＩドリル活用数 学習コンテストの結果	○ＡＩドリル活用数、月あたり３００問 ○学習コンテストの目標値達成	ＡＩドリル強化月間を設け、平均４０１問を達成した。	日常的に自分からＡＩドリルに取り組ませること、学習意欲につなげることを検証していく	○

2 継続	学習コンテスト	全学年 国語・ 数学・ 英語・ 社会・ 理科	実施日 3 週間前より朝･放課後の学力アップタイム（各 10 分）	各教科が、基礎知識の定着度の確認などコンテストの目的を定め、出題を吟味して実施する。 各教科で生徒の実態に応じて目標点を定め、生徒自身に各自の目標点を設定させて取り組ませる。 採点を生徒各自が行い、自己の課題を見出させる。	漢字：７月 計算：12 月 英語：10 月 社会：１月 理科：２月	○教科が定める目標点に達する生徒が 80%以上 ○各自が定める目標点に達する生徒が 80%以上	各自が定めた目標に達した生徒が６４％（1，2年：７２％）	生徒各自が根拠をもって目標値の定められるようにし、自己の学力を客観的に把握し、学習調整力を高める	△
3 継続	サマースクール	全学年 国語・ 数学・ 英語・ 社会・ 理科	夏休み期間中の７日各日 45 分	当該年度の前半期の内容でのつまずきを解消する。 少人数指導のもと、学習への興味の喚起と、知る・分かる喜びを感じさせ、学習意欲の向上を図る。	事前と最終回と確認テストを実施 生徒アンケートの実施	○実施前と実施後の確認テストの比較で各自が上昇 ○学習意欲に関するアンケートの肯定的評価の向上	サマースクール後のアンケートで、参加生徒全員が肯定的評価をした	ねらいを、基礎学力の向上と共に学習意欲の向上に定め、「できた」「なるほど」を感じる機会にさせる	○
4 新規	「考える授業」「問いをもつ授業」の実施	全学年 全教科	通年	生徒各自が授業のめあてと解決策を意識できるよう、主体的に考え対話的に考えを深める場面を設定する。 授業の最後に各自が何が分かったかをまとめさせ、学習調整力を育て、家庭での自主学習につなげる。	生徒アンケートの関連する設問 評価･評定の「主体的に学ぶ態度」	○年間を通して毎回５ポイント以上向上 ○90%以上の生徒の評価向上	４月：６８％ １０月：７２％ ２月：７４％ 目標値（９０％）には達しなかったが着実に上昇させた	小中で連携してアンケート項目と調査時期を検討・実施し、実態を把握・分析することで随時改善の手立てを講じる	△

重点的な取組事項－２	生きる力を育む教育

Ａ　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
・生徒の主体性を生かした取組の充実	・生徒アンケートにおいて、主体的な取組に関する問いに対して、肯定的評価を８５％以上にする。	４月：８２％ １０月：８１％ ２月：８３％	生徒個々の参画意識や当事者意識を伸ばしていくよう取組を工夫していく	△

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
主体的に考えて取り組む態度の育成	・作文、振り返り、生徒アンケートでの肯定的評価が 80%以上	・学校行事ごとに生徒の実行委員会を組織し、運営等に主体的に取り組ませる。 ・生徒主体で生徒会朝礼、学校紹介、部活動体験などを企画・運営させ共有させる。	実行委員・生徒会役員の達成度（肯定的評価）　１００％ 生徒全体での達成度　８５％	行事ごとの肯定的評価は高いので、学校生活全般での肯定的評価につながるよう、行事ごとの振り返りを重視していく	○
総合的な学習の時間（立志の時間）の充実	・作文、振り返り、生徒アンケートでの肯定的評価が 90%以上。 ・保護者アンケートにおいて、立志の時間に関する項目で肯定的評価が 85%以上。	・個人研究のポスターセッションで主体的な課題設定・解決、プレゼンテーション能力を育てる。 ・グループ発表を通して、対話的に課題解決をはかり、考えを深めさせる。 ・立志の時間で育てた能力を生かし、主体的に学習する態度を育てる。	生徒の振り返りでの肯定的評価　９５％ 保護者の満足度　９０％ 教員の目標達成度　９２％	目標値は達成しているが、内容をよく吟味し、その活動をとおしてどのような力をつけられるのかという視点をもち、生徒の能力を向上させていく	○
進路指導、キャリア教育の推進	・作文、振り返り、生徒アンケートでの肯定的評価が 90%以上	・職場体験、上級学校調べ・学校訪問等を行い、将来の夢や希望を広げる。 ・東京都英語村 TGG（TOKYO GLOBAL GATEWAY）での体験活動を実施する。 ・食育、保健指導、歯科指導を行い、健康に関する考えを深める。	生徒の振り返りアンケートでの肯定的評価　９２％ 作文（感想）の内容がキャリア教育の視点に沿って将来と結びついていた 毎月１回食育朝礼を実施した	自分の将来を意識し、今をどうとらえ、どのように努力して生きるかという考え方をさせることが極めて重要である。学校教育全般をとおして進路・キャリア・健康教育を進める	○

重点的な取組事項－３	思いやりの心や豊かな心を育む教育

Ａ　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
・人権尊重意識の向上（いじめの根絶）	・生徒の感想文やアンケートで、９割以上が人権意識を高める。 ・生徒アンケートにおいて、学校生活の満足度等の肯定的評価を８５％以上にする。	学校生活満足度 １年　８３％ ２年　８２％ ３年　８３％ １０月調査での「中だるみ」的な数値から全学年が上昇した。学級での満足度（助け合っていたなど）は９０％を越えている	他人を認めるためには自己肯定感を高めることが必要であるという仮説を共有した。 自己肯定感の育成のために、自己有用感や自己効用感を高める取組を意図していく	△

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
人権尊重意識の向上（いじめの防止と根絶）	・全ての生徒が人権課題を意識し、自分なりの考えをもっていることを生徒アンケートや作文から確認する。 ・生徒の課題に組織的に対応し、解決の方向性を確認できている。（校内支援委員会、生活指導委員会、学校生活アンケート等）	・学校生活アンケート、いじめアンケート、ＳＣや養護教諭、担任等の情報で生徒の課題をすばやくとらえ、組織的に対応する。 ・校内支援委員会、生活指導委員会を週１回実施し、情報を共有し、早期に組織対応していく。また、ＳＣやＳＳＷとの情報交換を密にし、計画的な支援を行っていく。 ・教育相談週間を設定し、全生徒と教員との面談を実施し、一人一人に寄り添った生徒指導を行っていく。 ・特別支援学級と運動会、フライングディスク、ビーチボールバレーなど積極的な交流を行い、人権感覚を身につける。	・校内支援委員会の記録を作成した。日付が経たないうちに共有することを心掛けた。 また、会議に参加していない先生方でも状況を理解できるような、内容にすることを心掛けた。 ・教育相談では生徒一人一人に寄り添える貴重な期間であった。普段は見えない困り感にも気付くことができる。	・引き続き継続していく ・自分自身の進路に関する情報や知識量を増やす ・教員の人権感覚の陶冶を図り、安心で安全な学校づくりを組織的に進める	△

豊かな心の育成	・学校・学年行事、道徳授業等の感想で、多くの生徒が思いやりの心や自己肯定感が高まったことを確認する。	・全教員のローテーションによる道徳の授業を実施し、全教員で道徳に関わりをもち、計画的に道徳教育を推進していく。 ・地域行事やＰＴＡ行事、ゆめはなプロジェクト（花壇づくり）などに多くの生徒が関わり、地域の一員としての自覚を培う。	・ローテーションで授業を行ってきた。ＩＣＴを活用して、生徒一人一人の考えを共有できた。 ・コロナによる制限が解除されたことで地域との関わりを模索しているが、今年度の成果としては表れていない	・引き続きローテーションでの取り組みを続けていく。 ・校則見直しなど、生徒会主体で行わせたことで、参画意識など意欲を高めた。次年度も仕掛けを作っていく	△

６　まとめ

（１）今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

〇今年度の成果と課題

・学力調査や学習コンテストの結果で、数値的に大きな成果をあげたとは考えていないが、生徒自身に目標を立てさせたり、達成への工夫をさせたことで、学習に取り組む意識に変化が生じていると考えている。生徒の学力を真に向上させるためには、生徒個々が自分の課題を自ら捉え、どのように解決していくかを調整する力を育てる仕掛けや機会を作っていく必要がある。

学力調査の通過率を向上させることを目標としつつ、生徒の学習に向かう姿勢を整え、一人一人が１点でも高い点数を取ろうという意欲と、とるための工夫をさせることで取れるという自信をもたせ、一人一人の学力を向上させ、全体の学力向上、通過率の向上を目指すことが重要である。

〇次年度へ向けての方向性

・個別の習熟度に応じた指導

今年度、英語科で少人数習熟度別指導（２学級３展開、１学級２展開）を実施した。栗島中学校の特徴である「一人一人に寄り添った指導」を学習面でも推進していく。

この「個に応じた指導」の視点を、各教科の学びに生かせるよう、学校組織として取り組んでいく。

・授業の見直し

学習の基礎・基本を大切にし、丁寧に指導をすることにとどまらず、生徒一人一人が学習を「自分事」として捉えることをねらって、「考える授業」「問いをもつ授業」への転換を図っていく。授業のはじめに教師が提示する「ねらい」とともに、「振り返り」を大切にし、生徒がその時間のポイントを自らが言語化（文章化）して意識することで、「分かった」「できた」が生まれ、主体的に学習に取り組む態度の育成を目指す。

・「立志」の力を学習の力へ

本校の教育活動の特徴である「立志の時間」では、課題発見能力・課題解決能力・プレゼンテーション能力の育成を図るとともに、コミュニケーション能力と自己開示力を高めている。

この力を学習にも生かせるよう、「授業の見直し」の中で「立志の時間」で生徒が身につけた力を生かせる工夫をさらに取り入れていく。

・ICTの活用

ＩＣＴ機器を学習の有効なツールとして、教師・生徒ともに活用を図ってきた。

教師においては、生徒の視覚に訴え、体感的に理解を進める活用を、生徒においては、ＡＩドリルでの復習、検索機能による知識取得、プレゼンテーションソフトによるまとめのほか、コミュニケーションのツールとして活用していく。

・小中連携の充実

同じ地域に生きる児童･生徒の特性や課題を小中学校で共有し、９年間にわたる支援･指導を連携して行い児童･生徒の全人的な育成を目指す。

授業での共通実践事項として「ねらい」と「振り返り」「まとめ」を充実させ、授業をはじめ自ら学習に取り組む態度を育てる。

（２）保護者や地域へのメッセージ

・校則の見直し

「校則は守るもの」が基本であり、守ることを通して規範意識を育てることを重視しつつ、不合理なものや、現在の環境にそぐわない校則は、生徒と教師がそれぞれの意見を尊重しつつ見直しを続けている。このことで生徒各自が学校生活の主体であり当事者であるという意識をもち、将来にわたる「主権者意識」を育てることを目指している。

・学校と家庭の連携

生徒の生活の基盤は家庭であり、学校では多様な人々との生活の中で社会性を育てていくことが必要。不安定な思春期を生きる生徒にとって、家庭と学校の中で安心できるよう、相談・共有・連携しながら生徒を見守っていける環境を作っていきたい。

・指導と支援

生徒の行動の背景には生徒の思いが隠されている。問題だと思える行動には、生徒が抱える困り感があると考えられる。「ダメ！」ということを教える（指導する）ためには、まず、その「困り感」に寄り添い、大人が一緒に解決策を考えてあげられるよう寄り添う（支援する）姿勢をもっていくことが必要だと考えて生徒を育てていく。

・ホームページ

学校生活の様子や生徒の様子を、毎日ホームページで公開している。是非ご覧いただき、少しでも学校の雰囲気に接していただきたい。

（３）その他（学校教育活動全般について）

・健康教育、安全教育の充実

「健全な精神は健全な肉体に宿る」ことを重視し、保健体育や部活動を通して身体の健康作りに積極的に取り組んでいく。

思春期の不安定な心に寄り添い、命と何かを問いかける生命尊重教育を推進し、自分が生きていることのすばらしさに気づける教育を進める。

・人権尊重教育の推進

人権尊重に関する教育を通して、自己と共に生きる他者を尊重する意識をもたせる。他者の尊重を通して、他者から尊重される自己の存在を感じさせ、他者との関係の中でも自己を尊重できる生徒を育成する。

・多様性を受け入れる人間性の育成

授業・特別活動・人権尊重教育を通して、人は一人一人が違い、違いがあることが尊いということを実感させる。自己が他者を認めることが、他者から自己を認めさせることにつながり、他者から認められるという実感から自己肯定感をもたせていく。

・キャリア教育

キャリア教育を通して、社会の未来と未来を生きる自分像を描かせ、将来に向かっての希望や期待、夢をもって生きる生徒の育成を目指す。

自分が生きていくこと、働いていくことが社会貢献（他者のため）であるという自己効用感をもたせ、それを通して自己有用感、自己肯定感をもてる生徒を育成する。